追　悼

前会長　芝哲夫先生を悼む

亀山哲也（化学史学会会長）

芝哲夫先生は平成22(2010)年9月28日，86歳でご逝去された．心より哀悼の意を表する．

芝先生は大正13(1924)年6月17日，広島県尾道市にお生まれになられ，昭和21（1946）年，大阪帝国大学理学部化学科をご卒業後，昭和46年に理学部教授，昭和63年に名誉教授となられた．

芝先生が日本の化学史研究を始められたきっかけは「昭和18年の阪大入学直後に大阪城西の地で「舎密局址」の碑を見て感銘を受けたことにある」と，昨年の7月，先生のお世話により阪大で開催した2回目（1回目は昭和58年）の化学史研究発表会（平成21年）に先立って行われたエクスカーションで，「舎密開宗」「適塾」に続く「ハラタマ胸像」の案内のなかで情熱的に語られたことを今も鮮明に覚えている．芝先生の化学史研究の原点に触れた思いである．

先生は昭和53年に初めてオランダを訪れ，ハラタマの直孫にお会いになるとともにハラタマ書簡などの資料を発掘し，和訳して『オランダ人の見た幕末・明治の日本－化学者ハラタマ書簡集一』を平成5年に出版された．平成12年には「日蘭ハラタマワークショップ」を記念したハラタマ胸像の建立に尽力された．

先生はまた，安政5(1859)年から長崎で行われた医学伝習の中でわが国最初の系統的な化学講義がポンペによって行われたことを，平成12年に先生が発見されたオランダ語による講義筆録から明らかにされ，和訳して平成17（2005）年に『ポンペ化学書―日本最初の化学講義録』として出版された．

更に，江戸後期の医師，緒方洪庵が開いた蘭学塾「適塾」の修復・再建に尽力されるとともに，研究成果の一端を『適塾の謎』として出版された．集大成としての成果の出版に向け，最後の校正をしておられたとのことであった．

先生は日本の化学史研究において顕著な業績を挙げられたのみならず，平成3年から8年間本学会の会長をつとめられた．本学会創立20周年を記念して，企業を対象とした維持会員制度の導入，『化学古典叢書』の刊行のみならず会員の増大，若手の育成等多大の貢献をされた．

先生はまた，日本化学会との連携事業にも積極的に取り組まれた．「化学の歴史に関する資料の展示」を企画し，平成3年より8年間にわたり，化学会館において実施された．日本の化学の先達，日本の写真の祖，舎密局とハラタマ等の展示は先生自ら担当された．小生も「日本における化学工業の近代化と東京工業試験所」を出展させていただいた．

更に平成15年の日本化学会125周年記念年会においては，日本の化学史料の展示を担当され，その成果は『日本の化学の開拓者たち』として平成18年に出版された．先生が日本化学史料の調査，研究，保存のための体制整備を強く唱えられたことが契機となり，平成20年より日本化学会と当学会の共催による化学遺産委員会がスタートした．先生は中心的な役割を果たされ，第一回の化学遺産の学術分野では先生ご推薦の「杏雨書屋蔵宇田川榕菴化学関係資料」「上中啓三アドレナリン実験ノート」「具留多味酸試料」が認定された．

芝哲夫先生は江戸から明治における日本の化学の開拓者たちの実像を膨大な史料の調査・解析から明らかにされ，日本の化学史研究の集大成をなしとげられ，化学史学会の発展にも多大の貢献をされた．まだまだご指導いただけるものと安心していたが，叶わぬものとなってしまった．

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げる．

芝哲夫先生が残されたもの

八耳俊文（青山学院女子短期大学）

芝先生の訃報を9月30日に大阪大学の中村征樹さんからの化学史学会の理事あてメールを通じて知った．今年になり人伝に体調を悪くされているとはお聞きしていたが，この知らせが今でも信じられない．いつも会うと励ましてもらったり，元気にしているかと声をかけてもらったりしていた者として，もう先生のにこやかなお顔とお声に接することができないかと思うと，このうえなく悲しい．先生は人に元気を与える人であった．

1991年に東北大学工学部青葉記念会館で化学史研究発表会が開かれた．同会で会った先生に会場までの交通手段についてお聞きすると，歩いて仙台駅から会場まできたと言われた．私は当時，東北大学へは仙台駅からはバスあるいはタクシーしか頭になかったので，この言葉に驚いた．その健脚ぶりに感心したが，その後，東北大学に行く機会に先生のまねをして歩いてみた．確かに歩けない距離ではない．逆に歩いたおかげで仙台の街がよりよく知ることができ，仙台市の地理も把握できるようになった．この後も，先生といろいろな研究会等で一緒になったが，会が終わったあと，みんなはバス停に向かうのに，先生は歩きを選ばれるとの場面にたびたび遭遇した．健康法も兼ねておられたのかもしれないが，先生の研究態度を垣間見たような気がした．

先生は日本最初の化学講義録としてポンペの化学書を翻訳されたが，この底本探しに国立国会図書館に通われた苦労話を化学史研究発表会で披露された．同館所蔵の化学関係の蘭書に求め，著者名のアルファベット順に並んだ目録にしたがい，請求しては閲覧，返却を繰り返したもののなかなか見つからない．あきらめかけたところ，ようやく「W」までいって「Wagner」の「De Scheikunde」が該当書だったと言って会場を沸かせられた．聞く側は単純に笑うことができなかった．研究とは大なり小なりこのような体験の連続であり，その厖大な労力と時間のうえに先生の業績があることが容易に想像されたからである．

1975年，「大阪舎密局の跡をもとめて」と題する先生の論文が，中央公論社の科学雑誌『自然』に載った．前年，同誌に菊池重郎氏が田中芳雄文書をもとに「大阪舎密局の再発見」を書かれたのを，別の資料から論じられたもので，共通して昭和12年に第三高等学校同窓会建立の「舎密局趾」の記念碑にある「此地」が間違いと結論づけられた．菊池氏の推論も説得力あったが，芝先生の研究も徹底していた．

同論文では昭和18年に大阪大学理学部に入学して間もない時期に大阪城の公園で総長の戦争に対する訓辞を聞いたあと，「舎密局趾」の碑に出会い，戦争が終わったらぜひ大阪舎密局のことを調べようと思ったという文章からはじまり，実に発表まで「調査は細々ながら三十数年も続くことになった」とされている．同論文は資料探究の成果が主であるが，緒方洪庵の孫，緒方銈次郎から舎密局の位置について伺った話が出てくる．「私は終戦前に大阪難波のお宅に緒方銈次郎翁を一度ならずお訪ねして，舎密局についていろいろのご教示を賜った」と．すでに終戦前から研究を開始されていたのである．

そして同翁から今の碑の位置は間違っていると聞かされ，この証言を裏付ける物的証拠を求め，同地付近で「新しい建築工事が始まったと聞くと飛んで行ってシャベルカーの横に終電車まで頑張り，舎密局時代に使用されたオランダ渡りのガラス器具の一片でも発掘されないかと空しい努力を続けたことも幾度かあった」と書かれている．先生は大阪大学の理学部の化学の先生が本業だった時代のことだから，もう十分に歴史研究の徹底さを身につけておられた．この徹底さを読み取った『自然』編集部は，掲載論文の紹介を兼ねた「もう一つの目次」で「芝教授の大阪舎密局に寄せる情熱には並々ならぬものがあるが，“蘭癖”に通じるものかもしれない」と記している．この情熱がハラタマの子孫との出会い，ハラタマの手紙の発見につながり，『オランダ人の見た幕末・明治の日本』に結実したことはよく知られていることである．

幕末・明治の化学を調べると，必ず芝先生の研究があった．先生は昨年の2009年，大阪大学で開催された化学史学会の研究発表会で特別講演をされ，「私の化学史研究―日本の化学の創生期―」と題して自分の研究を振り返られた．講演予稿が『化学史研究』36巻2号に載っているが，大阪舎密局の研究からはじめられ，一つ一つ研究を広げて行かれたことがよくわかる．既存の研究で満足することなく，必ず資料発掘に努められ，それを後代に利用されるかたちで紹介された．『杏雨』に発表された「杏雨書屋宇田川榕菴資料（Ⅰ）～(Ⅳ)」は圧巻であった．武田科学振興財団の杏雨書屋に所蔵される宇田川榕菴資料を1点ごとに解題をつけられたものである．にわか仕込

みとはおよそ対極に位置づけられるお仕事であった．1点1点，手にとり，ノートにとり，あれこれ考察を重ね，ようやく原稿にできるものである．かつてショベルカー横で終電車の時刻まで探し求められた情熱があってこそ完成するものである．こうした努力を日本の化学の創生期解明に発揮された．

化学史だけでなく，適塾の研究もすすめられ，ペプチド研究所所長の要職を務められた．専門家向け，一般向けを問わず講演も数多くなされた．人の受け売りでなく，長年のご自分の調査研究の成果のうえでの講演だったから，そして伝えたいとの気持ちを強くもっておられたから，講演を聞いた人は感銘を受けたに違いない．聴衆の中に田中耕一氏がおられ，その直後，彼がノーベル化学賞を授与されたことを喜んでおられた．

前述のポンペの化学講義録とその原典を2004年化学史研究発表会で講演されたが，プレゼンテーションソフトを用いての発表であった．私はいまだこの形式での発表に慣れていない．でも先生はこだわりもなく難なく取り入れられて講演を進められた．その後もすっかりこの形式で発表されていた．理科系だからといってパソコンの最新操作に全員つきあえるものではない．先生の「新しさ」に驚くしかなかった．

長年の研究は何に向けられていたのであろうか．先生は化学の学徒であった．自然の解明に化学が，人類がいま直面している問題解決に化学の知識が必要であることは誰も疑うものはない．しかし公害問題を契機に化学が誤って理解されていることを嘆いておられていた．日本の化学の創生期の化学者たちの志しの高さと絶え間ない努力があったからこそ，現在の日本の化学が，ひいては世界の化学に寄与していることを明らかにしたいとの希望を強くもっておられた．もはや新たに先生の毎回進化する研究をお聞きすることはできなくなった．でも先生が残された業績は次の世代が継承し，必ず進化させて次の世代へと渡すことを誓いたい．先生，本当にご苦労様でした．

芝哲夫先生とその時代

塚原東吾（神戸大学）

芝先生の訃報に接し，心からのご冥福をお祈りするとともに，ひとつの時代が終わったという感慨を禁じざるを得ない．昨年9月，大阪大学で開催された化学史学会では元気なお姿を拝見し，芝先生のセッションの司会をさせてもらったこともあり，突然の訃報に驚くばかりである．小生のように化学をかじった者からすると，化学の世界で第一線の仕事をしながら化学史を極めていた芝先生には，脱帽すること殊更であった．小生は芝先生がかなりのご年配になってから接したので，穏やかな中からも眼光鋭い芝先生は古武士の風貌よろしく，腰の据わった鷹揚とした構えには，黒沢映画の風さえをも感じられた．恬淡としながらも，「さあ，どこからでもかかってきなさい」と云わんばかりの無敵の風格を持つ芝先生からは，いつも闊達なる激励や刺激をたまわった．

小生にとって，芝先生はやはりハラタマとポンペ，適塾と大阪舎密局の芝先生である．なかでもハラタマの研究をはじめとする日蘭交流史への貢献，日蘭交流400周年でのハラタマ・シンポジウム（2000年）などの貢献に対して，オランダから2001年に「オラニェ・ナッサウ騎士勲章（Ridder in de orde van Oranja-Nassau）」を当時のオランダ総領事館ヤン・デ・フリース氏を通じて授与されている．これは大変栄誉のある賞であり，何しろオランダ王家であるオラニェ・ナッサウ家の「騎士」（Ridder）に列される（orde）ものである．サムライな感じの芝先生にはぴったりである．（この受賞についての正確な情報と記録については，デ・フリース氏も既に亡くなられたので，オランダ総領事館文化広報担当官ジュリアン・リックールト氏によって確認していただいたものである．）

芝先生の訃報に際して，ライデン大学医学部名誉教授のハルメン・ボイケルス博士は，「芝哲夫氏は蘭学研究において非常に大きな刺激を与えてくれる人物であり，研究面での革新性，心の広さ，そして研究にかける熱意は印象的であった．そして何より，同氏は，大阪においてまさにこの人ありと言えるような，適材適所を端的に表す人物であった．（the right man of the right place, Osaka!）そして松江で発見されたポンペの講義録を素早く翻訳され出版したものを私に見せられた時の驚きは忘れない．ハラタマ，緒方洪庵と適塾の研究など多くの研究分野について熱意を持ち展開していた同氏の死去は，蘭学と日本の化学史研究にとって大きな損失である．」との一文を寄せている．

そもそも戦時中，大阪舎密局の碑を見出されたときか

ら，日本の化学の淵源をライフ・ワークとされたという．その芝先生が，化学教師であるハラタマの研究をオランダで進めたエピソード（電話帳からハラタマという苗字の家に全て電話をかけたというもの）は，芝先生ならまさにやりそうだと思わせるものである．この電話による子孫の追跡をオランダで手伝ったライデン大学・講師の蔡妙齢（Miao Ling Tjoa）女史からも，芝先生のお人柄を偲び，訃報には驚きを感じたが，ハラタマの子孫を探し当てた折に，芝先生の精力的な調査を支援できたことを懐かしく思うとともに，先生の研究にかけた情熱に触れたことを嬉しく思える，そしてご冥福を祈りたいとの旨，一文をいただいている．このようにオランダ関係では，芝先生は大きな足跡を残し，関係者に強い感銘を与えた．ハラタマをめぐる研究を手始めに，書簡集の翻訳（フォス教授夫人との協力）や出版を始め，幕末・明治の化学は芝先生のエネルギーで，続々と解明されていった．

ポンペについて，松江でポンペの講義録・化学ノートが発見されてからの芝先生の仕事ぶりには，驚かされるものがあった．オランダ語の手稿ノートを，大変な勢いで翻訳されたのだ．今思うなら，芝先生は，人生の残り時間を意識しておられたのかもしれない．日本化学史において，これだけ詳細な記録はきわめて貴重なものであり，芝先生のお仕事ぶりは，つくづく，刺激されるものであった．

芝先生への追悼に代えて，古武士の風貌と書いたが，むしろ大藩のご家老のごとき包容力の大きなお人柄を表す個人的な思い出を一筆しておきたい．小生は日本帰国後の一時期ある難局にあり，またどうも人間関係などもうまくいかずに倦んでいたため，化学史学会とは若干疎遠となっていたことがあった．その頃に芝先生より一喝されたことがある．ワシは君をひきたててやろうと思っておるんだ，こちらに顔を出さんとはけしからん，君は若いのだから，もっと働け，というわけだ．たしかに，非はこちらにあるし，いろいろ調子の悪い時のあの一喝は効いた．しかしこちらも事情があった．その旨，小生から一筆して，なんとかご海容を請うたのである．その折，芝先生から，お返事として丁寧なお手紙をいただいた．それは事情も分からず一方的に叱責したことをむしろ詫びるという内容であった．これには逆に，全く恐縮した．あとでつらつら聞くと，会長職を退かれるころにあった化学史学会では芝先生も大変なご様子であったようだ．そんな中，若手（あまり若くはなかったが）を激励する意味で，小生に活を入れようとしたのだろうという気持は，今になれば（自分もアカデミックには中間管理職，すなわち研究室経営にある立場なので），まあ，よく分かる．あの一喝は，おとなしく聞いていただけでよかったのに，むしろいらん申し開きなどをして，逆に芝先生に気を遣わせてしまったのは，全く，今もって，恐縮千番であって，今でも，冷汗の出る思いである．

このやりとりの後，1998 年の津山での化学史学会では，ゼミ生たちを連れて参加した際，久々に芝先生とお会いして，小生の非礼を詫びた．芝先生からは，いつもながらの激励をいただいた．さらに小生の学生たちへの言葉がけもいただき，「君はいい青年たちを指導しておるな」と言われ嬉しかったことを思い出す．津山でのテーマであった宇田川榕菴についてはシンポジウムや『化学史研究』はもとより，『化学』での宇田川特集にも芝先生とご一緒に執筆させていただいた．そしてその後も，相変わらず，どうにも散漫にして怠惰なる小生だったが，芝先生からは，さまざまな面で，まさに「引き立てて」いただいていた．ポンペの講義録を見つけた時には，本当に嬉しそうに，「すごいものを見つけたぞ」，と語ってくれた．2001 年にオランダからの勲章を受け，総領事のヤン・デ・フリース氏に呼ばれたパーティーでは，「次は，君の番だぞ．ワシが先で，すまんな，ワッハハ」と，激励含みの冗談まで言われた．このような関係が 2009 年，昨年の大阪での会議まで続く．辛うじて 2005 年には，不足が多く気も利かない会場担当だったが，小生の勤務校である神戸大学での化学史学会の開催もさせていただき，シンポジウムも組織できた．これで若干の恩返しができたのかもしれない．

最後になるが，芝先生の時代とは，化学者でありながら化学史をライフワークとする先生方の時代であったように思う．ほぼみな（直接ではないかもしれないが最後の）戦争時代の経験を持たれている．もしくは戦後の冷戦とマルクス主義の隆盛期，そしてそれらによる厳しい対立を経験されている．そのためか否かはさだかではないが，阪上正信先生・立花太郎先生にしても柏木肇先生にしても，小生がご存命中に接した化学史関係の先生方からは，みな芝先生と非常に近いものを感じられた．ルーカス的な比喩を使うなら，だれもが歴戦のジェダイ元老院のメンバーの風格を持つように思える．それは先人方が，われわれとは歴史的な異文化を経験され自己形成

されたのだという意味もこめてである．だからこれからの問題は，化学そして化学者と化学史の距離感であろう．化学は専門化し，制度化し，細分化をますます進めており，化学史とか化学と社会の関係とかからやや距離を持つようになってきている．化学史自体も制度化して，その対象（object であり同時に subject）のはずの化学から，別のもの（それは果たして discipline と言えるだろうか？）になりつつある．果たして小生のような不肖のものが，芝先生の追悼文をしたためるなど，僭越も甚だしいのではと思われる．それはなぜなら，芝先生には，そもそも「本業」であったペプチド化学の方面でのお弟子の歴々がおられるはずだ．その筋の方々が化学史を書かれる時はいつ，どのようなかたちで来るのだろうか．基本的に芝先生の化学史を継承する方は，物事の順序として，そちらにおられなくてはならないはずだが，そのような継承性を想定するのは，間違いなのだろうか．そしてその方々と，われわれは，どのような関係になるのだろう．興味はつきないのだが，ノーベル賞で化学賞が日本の「お家芸」とまで言われるようになってきている時代を芝先生がどのようにお考えになるか，芝先生が亡くなられた今となっても，われわれはいつも，あの激励や一喝を念頭において，芝先生に語りかけるように歴史的な対話をし続けるだろう．

芝哲夫先生の思い出

菊池好行（マサチューセッツ工科大学）

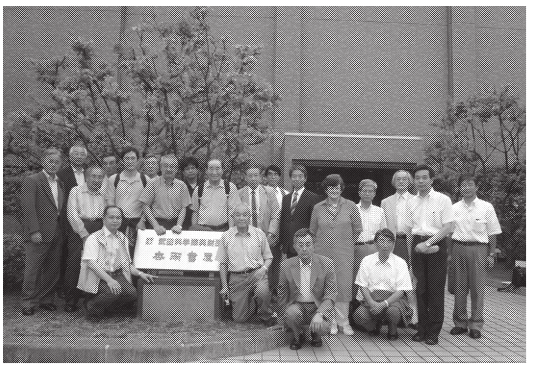
私が芝哲夫先生に初めてお目にかかったのは，1993 年に化学史学会に入会してから数年経ったある日，おそらく化学古典研究会の席であったと記憶しています．初めは会長としてのお立場上，新米会員の私には遠い存在に思えたのですが，実際にお話ししてみると，ご自身の知見を惜しみなく分け与え，気さくに後進を励まされる方でした．化学史に興味を持って入会したとはいえ，化学科出身ではなく知識も乏しかった若輩の私を同学・同好の士として扱ってくださいました．私に化学史家としてのアイデンティティーを与えたのが先生であり，当時の化学史学会であったと言えます．

忘れ難い思い出として，私のイギリス留学が近付いた 2002 年春の出来事があります．先生から「君からの質問を受けて，思い立ってうちの書斎を探していたら出てきたんだ．研究に役立ててください」の言葉とともにいただいたのが，桜井錠二が海外から受け取った書簡のコピーの束でした．拙稿「桜井錠二とイギリス人化学者コネクション」（本誌 31 巻［2004 年］）はこれ無くしてはありえませんでした．そのうち書簡を翻刻した部分を読んだイギリス人化学史家 Colin Russell 氏は「Williamson に関する一次史料が乏しい中で，これは大変貴重な資料だ」と私に感慨を述べています．芝先生への恩義を改めて感じると同時に，歴史研究において人から人へと伝えていくことの重要性を痛感しました．

また留学中に史料収集のために一時帰国した 2004 年に，大阪府豊中市のご自宅を訪れたことがあります．先生は明治初期の工業化学者でイギリスに留学した西川虎之助や岸本一郎，あるいはご自身が化学史研究に携わるようになったきっかけなどに関して，熱心にお話をされていました．

留学から戻り，初めて出席した化学史学会の 2007 年度年会で，芝先生のご講演「明治初期のセメント製造にたずさわった化学技術者鈴木儀六」（本誌 34 巻）を拝聴しました．明治期の日本の工業化については，洋学者とお雇い外国人・留学経験者の役割の比較評価がよく議論されますが，先生のご発表はまさにこの大きなテーマの核心をつくものでした．感銘を受けると同時に，先生の化学史・洋学史に対する情熱が全く衰えていないことを改めて知る機会となりました．

2008 年以降再び海外在住になったこともあり，その後先生に直接お目にかかる機会は無くなりましたが，毎年のクリスマスカードには，日本的な趣味のよいカードで丁寧なお返事と励ましを頂戴していました．最後に先生にお目にかかったのは，アメリカ・フィラデルフィアの Chemical Heritage Foundation での研究員の任期を終えて一時帰国した 2009 年夏，東京お茶ノ水の化学会館を訪れた時でした．長くお話しする時間はありませんでしたが「これからも健康に気を付けてがんばってください」と激励をいただきました．このお言葉通り，化学史の後進としてこれからも研究を続けていくとともに，世界に向けて日本化学の歴史を発信していくのが私に与えられた責務であると感じています．先生のご冥福を心よりお祈りいたします．



2009年7月3日　杏雨書屋前にて（エクスカーションのひとこま）

以下に掲載するのは，2008 年度の年会において芝哲夫氏に第 2 回学会賞「特別賞」を授与するに際し，学会事務局が芝哲夫氏本人に用意していただいた「履歴書」と「化学史関係調書」です．芝哲夫氏の活動の貴重な記録として，ここにとどめます．

なお，芝哲夫氏の特別賞に関する会報は，『本誌』第 35 巻第 4 号 (2008)：245-247 にあります．この会報には，1991 年にスタートし，2000 年に第 18 回を数えた日本化学館における「化学の歴史に関する資料の展示」のリスト（表 1），ならびに「芝哲夫名誉会員化学史関係主要著作目録」（表 2）が採録されています．

履歴書　　芝　哲夫

大正 13 年 6 月 17 日生　生誕地：広島県尾道市

学歴

昭和 21 年 9 月　大阪帝国大学理学部化学科卒業
21 年 9 月　大阪帝国大学理学部大学院特別研究生
34 年 11 月　理学博士

職歴

昭和 25 年 4 月　大阪大学理学部助手
35 年 1 月　米国 National Institutes of Health 客員研究員
37 年 7 月　大阪大学理学部助教授
46 年 6 月　大阪大学理学部教授
54 年 3 月　日本化学会近畿支部長
56 年 3 月　日本化学会副会長
57 年 5 月　文部省学術審議会専門委員
58 年 2 月　日本学術振興会専門委員
60 年 7 月　日本学術会議会員
62 年 9 月　米国 NIH Fogarty Scholar
62 年 9 月　国際ペプチド化学シンポジウム組織委員長
63 年 4 月　大阪大学名誉教授
63 年 4 月　財団法人蛋白質研究奨励会ペプチド研究所所長
63 年 11 月　適塾記念会理事
平成 2 年 7 月　西宮市植物生産研究センター名誉所長
2 年 10 月　日本ペプチド学会名誉会員
3 年 1 月　化学史学会会長
3 年 7 月　日本糖質学会名誉会員
8 年 10 月　国際内毒素学会名誉会員
10 年 2 月　ハラタマワークショップ組織委員長
18 年 7 月　関西日蘭協会会長
20 年 4 月　日本化学会名誉会員

受賞

昭和 57 年 4 月　日本化学会賞
平成 8 年 11 月　西宮市民文化賞
12 年 4 月　オランダ王立科学芸術アカデミーハラタマ賞
12 年 11 月　大阪市民表彰
13 年 5 月　オランダ王国オラニエ・ナッソウ勲章
14 年 11 月　勲三等旭日中綬章
17 年 11 月　大阪文化賞

現職（2008 年度）

大阪大学名誉教授
財団法人　蛋白質研究奨励会ペプチド研究所所長

主著

『立体化学』 1971　化学同人
『化学ア・ラ・カルト』 1979　近畿化学工業会編
『ライフサイエンス　有機化学』 1980　化学同人
『有機化学実験のてびき』I〜V　1988―1991　化学同人
『オランダ人の見た幕末明治の日本』 1993　菜根出版
『化学物語 25 講』 1993　化学同人
『長寿の科学』 1996　菜根出版
『生命の化学』 2001　ブレーンセンター
『適塾の謎』 2005 年　大阪大学出版会
『ポンペ化学書―日本最初の化学講義録』 2005　化学同人
『日本の化学の開拓者たち』 2006 年　裳華房

化学史関係調書　芝哲夫

化学史学会における活動

○昭和 58 年（1983）10 月 15 日開催の大阪大学における化学史研究会年会の企画，運営を担当した．

○平成 3 年(1991)化学史学会会長に就任．学会の財政建て直しのために維持会員制度の導入を提案，10 数社に懇請して維持会費の納入を実現し，会の財政収支を補塡する体制を整えた．

○平成 4 年（1992）米国化学史学会ベックマンセンターへ日本化学史学会を紹介する英文を送付した．

○平成 4 年（1992）～平成 8 年（1996）会員の総意により企画された化学古典復刻事業の準備のため化学古典研究会を立ち上げ，その準備金として三菱財団，アサヒビールより各 100 万円の寄付金を要請，受領した．これにより同研究会はこの間に数回開催され化学古典発刊の準備を整えた．

○平成 5 年（1993）11 月 7 日，化学会館において化学史学会 20 周年記念講演会「日本の伝統技術と化学」の開催を企画，実施した．

○平成 10 年（1998）化学史学会 20 周年記念事業として『化学古典叢書』（川本幸民『化学新書』3 巻，同『兵家須読舎密真言』2 冊）の刊行に当り，製作を菜根出版に，その発売を紀伊国屋に斡旋，委託して刊行体制を実現した．

○平成 10 年 (1998) 8 年間勤めた化学史学会会長を引退．

日本化学会における化学史関係事業

○平成 3 年(1983)日本化学会として退職化学教授の業績記念誌を収集する事業を開始する要請文を提出した．

○平成 3 年（1991）～平成 12 年（2000）日本化学会の要請を受け，化学会館 3 階の図書室において「化学の歴史に関する資料の展示」を企画し，8 年間に 18 回にわたり展示を計画，依頼，実施の任に当った．平成 12 年に至り，1 階ロビーにおいて同趣旨の恒久的展示ケースが設置されることになり，その最初の展示を担当した．

○平成 5 年（1993）御園生誠日本化学会会長に日本の化学関係資料を日本化学会として調査，収集，保存する必要性を進言した．

○平成 15 年（2003）野依良治日本化学会会長に日本の化学遺産についての意見書を提出した．

○平成 15 年（2003）日本化学会 125 周年記念年会に際して，会場の早稲田大学において日本化学史料の展示を担当し，記念式典に出席された天皇，皇后両陛下を御案内御説明申し上げた．その時の天皇の御挨拶にあった「日本の化学の道を開拓した先駆者たちの高い志」のお言葉を受けて『化学とと教育』誌に乞われて，12 回にわたり「日本の化学を切り拓いた先駆者たち」を掲載した．後これは『化学アーカイブズ』にまとめて日本化学会から出版された．さらにこれは要望に応じて一般啓蒙書の『日本の化学の開拓者たち』2006，裳華房として出版された．

○平成 17 年（2005）に日本化学史料調査，研究，保存のための化学アーカイブス委員会が日本化学会の事業として植村栄委員長の下に出発し，当初からその企画に携わり，同委員として現在（2008 年）に至っている．化学アーカイブズ委員会は平成 20 年（2008）より化学遺産委員会と改称され，化学史学会からも亀山会長，内田理事が委員に入られた．

○平成 19 年（2007）3 月に関西大学において開催された化学会年会の展示場において化学アーカイブズ委員会としてはじめて化学史料展示を行うことが企画されその実施を担当した．

日本化学史の研究

舎密局についての調査，研究

○昭和 18 年（1943）大阪帝国大学理学部化学科に入学直後，大阪城西の地で「舎密局址」の碑を見て感銘を受けたのが動機となり生涯にわたり，舎密局とハラタマの調査を行うことになった．

○昭和 53 年（1978）はじめてオランダを訪れ，ヘームステッド市で舎密局教頭 K. W. ハラタマの直孫を発見し，以来連絡を密にして同家所蔵の舎密局本館，舎密局開講記念写真，ハラタマ書簡などの資料を発掘した．

○昭和 63 年（1988）1 月 16 日に大阪科学技術センターにおいてハラタマの子孫を招いて「ハラタマと日本の化学―ハラタマ先生没後百年記念講演会」を日本化学会主催で開催した．

○平成 5 年（1993）オランダのハラタマ家で発見した K. W. ハラタマが日本滞在中，オランダへ送った書簡集を和訳して『オランダ人の見た幕末・明治の日本―化学者ハラタマ書簡集―』を出版した．

○平成 12 年（2000）の日蘭交流 400 年記念事業として日蘭化学会議第 1 回ハラタマワークショップ“Role of Chemistry for Sustainable Society on Earth”を大阪大学において開催し委員長を勤めた．

○平成 12 年 (2000) のハラタマワークショップを記念して大阪城西の舎密局址の近くにハラタマ胸像を募金によって建立，設置した．

その他の日本化学史に関する研究

○宇田川榕菴資料の研究．

武田化学振興財団杏雨書屋所蔵の宇田川榕菴稿本資料総合的調査研究を行った．特に『舎密開宗』未刊部分の稿本発見し，近く修復，刊行の予定である．

○ポンペ化学講義録の発見．

安政 5 年（1859）から長崎で行なわれた医学伝習の中でわが国では最初の系統的な化学講義がポンペによって行われた．平成 12 年 (2000) に発見されたその時のオランダ語による講義筆録を和訳して平成 5 年(1993) に『ポンペ化学書―日本最初の化学講義録―』として出版し，その底本の解明を行った．

○真島利行伝の刊行．

平成 5 年（1993）に真島記念有機化学シンポジウムにおける故久保田尚志氏の真島利行についての伝記的講演を活字にすることを計画し，私家本として久保田尚志『日本の有機化学の開拓者真島利行』として発行することを斡旋した．

○日本化学者の事績研究

幕末から明治にかけての以下に述べる多くの日人化学者の事績，業績を調査，研究した．これらの調査結果の一部は化学史学会年会ならびに和光純薬時報の「化学大家」シリーズとして発表した．その人名は下記の通りである．

川本幸民，河野禎造，上野彦馬，宇都宮三郎，長井長義，松本銈太郎，榎本武揚，中島治平，明石博高，三崎嘯輔，高峰譲吉，吉田彦六郎，岸本一郎，西川虎之助，久原躬弦，高松豊吉，池田菊苗，鈴木梅太郎，真島利行，柴田雄次，その他．

2009年7月3日　ハラタマ胸像前にて（エクスカーションのひとこま）